

二〇一三年九月一三日

畦道の朝露蹴つてジョギングす
裏門は閉ざされしまま露むぐら
故郷の島の高きに登りけり

さつき
きづな
うつぎ

二〇一三年九月一二日

月光に濡れたる路地を通夜帰り
陵の山の高きに登りけり
地団駄を踏みて毬より栗を出す
露草へしぶきを飛ばす水車かな
月光が抱擁したる夫婦岩

宏 虎
雅 流
あさこ
さつき
宏 虎

二〇一三年九月二一日

早稲晩稲パッチワークとなる棚田
赤とんぼ赤いポストを好みけり

うつぎ
よし子

二〇一三年九月二〇日

入院も避暑と思えば苦にならず
腕まくりして細腕の案山子かな
一溪の岩の大小水澄める
虫の音にこころ安らぐ仕舞風呂

三 刀
なつき
雅 流
満 天

二〇一三年九月九日

ホームまで葛押し寄せる山の駅

うつぎ

二〇一三年九月八日

秋の夜のスカイツリーは五輪色
爽やかに存問交はす垣根越し
露天湯に手足のばせば虫浄土

つくし
菜 々
よし子

二〇一三年九月七日

秋天へセコイア鉾を競ひけり
背高の秋草丁目石隠す

菜 々
雅 流

毎日句会みのる選・二〇一三年九月一五日